抑圧された時間は、記憶を含めた“感覚”が回復されたときに、
はじめて向き合うことができるのです

—ユン・ハンソル

© Shinichi Tsuchiya

感覚の回復と、現実からのエクソダス

INTERVIEW

ユン・ハンソル
Hansol Yoon

聞き手：相馬千秋
写真：菊池良助
Interviewed by Chiaki Soma
Photo: Ryosuke Kikuchi

朝鮮戦争の記憶を扱う問題作として、韓国国内で高い評価を得たグリーンピグの『ステップメモリーズ――抑圧されたものの帰還』。待望の来日公演ではフェスティバル/トーキョー12のメイン会場の一つであるにしすがも創造舎全体を使い、この「歴史のなかで抑圧された記憶」に再度挑む。韓国固有の歴史が東京の記憶と混交し、私たち自身が抑圧してしまっている感覚が呼び覚まされることになるだろう。

語り得ない「感覚」を掘り起こすプロセス

――『ステップメモリーズ』は、語りえない過去・歴史・記憶を、演劇というメディアを媒介にして語っていこうとしているわけですが、なぜあえて朝鮮戦争を題材にしたのでしょうか。

「個人的には、9.11発生時にニューヨークに滞在していたことがきっかけです。その後３年弱ほど戦争を題材にして作品づくりを行なっていました。ソウルに戻ってからは他のテーマについても扱ってきましたが、いまの韓国社会の諸問題の根源に、やはり朝鮮戦争があるのではないかと感じたんです。それで『ステップメモリーズ』をつくりはじめたんですが、それは、記憶を繋ぐというよりは、一般の人々への抑圧として作用する権力、それに対する怒り・告発をテーマにしていました。ところが共同制作のなかで、それは単純な告発でどうにかできるものではないと考えるようになりました。むしろ、今まで語りえなかった記憶をどう語るのか、また今まで起きたことが起きないようにするにはどうすればいいか、ということに制作のテーマがシフトしていったのです」

――「記憶の再現ではなく、記憶との対談をしたい。記憶の回復ではなく、感覚の回復である」という言葉が戯曲にも書かれてあると思うのですが、そのアプローチに辿り着いた理由をお伺いできますか。

「告発というのは、虐殺された人たち自身、その家族、加害者、被害者が長い時間語りえなかったなにごとかへの告発です。ところが、朝鮮戦争の記録やそれに対する表現を読み解いていくと、多くの人が朝鮮戦争の記憶を語れなかった理由は、見えない権力や力によるものだけではなかった。そこには、この記憶を語った後、自分はどう生きていくのか、そのことに対しての恐れがあったのです。たとえば、自分の親が殺された記憶を語った後自分はどうなってしまうのか、といった恐怖です。

作品の冒頭ではいくつかの証言があり、また沈黙があります。半分以上は沈黙で作品はつくられています。事実に基づいて歴史を再構成するだけでは、その記憶を弔うことはできない。また、それが起こらないようにすることもできない。むしろ、抑圧されている記憶と、我々は今一緒に生きているということ、その“感覚”を浮き彫りにすることのほうが重要だと思ったのです」

――沈黙も含めて、記憶自体を演劇的な方法によって埋葬していく、そのことによって何か別の到達点に辿り着けるのではないか、ということですね。台詞のなかに「我々は被害者でありながら加害者でもある。なぜみんなが被害者であり、加害者であるのかを明らかにしなければならない」という一節があります。ここで重要なのが、被害者や当事者をどのように表象するのか、ということです。

「被害者側に立って語ることは簡単で、加害者の立場となって語ることは非常に難しいことだと思います。この戦争について調査を続けた結果、虐殺に関わった加害者の多くの方々が、精神的トラウマに今でも苦しんでいることがわかりました。一方、公演を通じて虐殺を直接的に体験させることは不可能です。ではいかに語ることの難しい経験に、感覚的に近づくことができるのか。

そこで生まれたアイデアは“土”です。作品のなかで“記憶”を埋葬するための土を、公演の最後にみんなで触る。土は、戦争や虐殺がどうだったかということを定義せず、すべての体の感覚を使って向

歴史のなかで抑圧されている記憶と、私たちはどのように巡りあうことになるのか。
そうした感覚を回復する方法論が伝わればいいなと思っています
—ユン・ハンソル

き合わないといけないものです。抑圧された時間は、記憶を含めた“感覚”が回復されたときに、はじめて向き合うことができるのです。

もう一つ大切なことは、なぜ一般人が死ななければならないのか、ということ。戦争は政治的決定の連続です。私は国民よりも政治が優先されるこの社会の状況に対して、問いを投げかけたいのです。その問いに答えてからこそ、なぜ記憶が抑圧され、隠ぺいされざるを得なかったのかついて明らかになると思います」

作品が抵抗やエクソダスの手段になる

——ユンさんはご自身で書かれたマニフェスト『演劇宣言』の中で「作品とは抵抗、あるいはエクソダスのためのマニュアルや道具である」とおっしゃっています。つまり作品とは“手段”である、と。

「私は、芸術とはそもそも政治的な行為だと思っています。それは、世の中の物質的な生産活動に貢献しないものです。つまり、食べるためや、生きるための最低限の保証にはならない、ということです。それでは、私たちはどのようにしてこの社会に貢献できるのか。映画やテレビには、夢や不鮮明な未来、ねつ造された過去がよく映し出されている。それは、観る側が現実と向き合いたくないからなのだと思います。私が目指すのは、現実という“ナマ”のものを、より生々しく経験させることです。エクソダスと言ったのは、私たち自身が、現実について発言することそのものが“抵抗”となる時代にいるからです。

今の韓国の現実を考えると、人々を苦しくさせているのは、欲望があるからだと思っています。日本でもそうかもしれませんが、特定の企業や政府の問題ではなく、人々の欲望が開発というかたちで現われる。都会に住む人がもう少し広い部屋に住みたいだとか、公園が増えたらいいとか、それらの欲望が集まって、結果的に自分の隣人を追い出してしまう。つまりこの欲望を見直すことが、現状の過酷な現実から抜け出す一つの方法だと思っています」

アジアの同時代について

——韓国演劇シーンのなかで、グリーンピグはどのような位置づけだと考えますか？　また今後どのような活動を展開していきたいですか。

「グリーンピグは僕の他に一人演出家がいる団体なので一概には言えませんが、ある意味、境界線の上に立っている団体でしょうね。私はあまり好まない表現ですが、演劇とダウォン芸術(註1)の間にあるカンパニーの一つ、また伝統と実験の境界線に立っている団体だと思います。作品の問題意識的には一番左にいるカンパニー、という評価を受けているけれど、それは作品だけではなく、『演劇宣言』に現われているような態度も含めてでしょうね」

——ユンさんは今回、韓国の歴史的問題を作品のなかで扱い、それ

グリーンピグとは？
ソウルを拠点に、分野横断的なコラボレーションを通してオリジナル作品や再構成された古典作品を上演する演劇集団。自らの活動を抵抗やエクソダスの為のマニュアルあるいは道具と捉え、社会、政治、演劇における既存の価値を問い直し、常に新しいテーマと芸術的形式に取り組む。主な作品に、『私は嬉しい』(07年)、『ヴィンカがなければ私は寂しすぎる』(08年)、『ステップメモリーズ—抑圧されたものの帰還』(10年)、『誰がモハメド・アリの顔にミサイルパンチを投げたのか』(10年、南山アートセンター)、『I am Sexking』(11年、演劇実験室恵化洞1番地)など。

註1　2005年以降の韓国で新しく使われ始めた言葉で、演劇、ダンス、映画、美術など、既成の枠にはまらない多元(ダウォン)的なジャンルのことを指す。

© Ryosuke Kikuchi

を日本で上演するのですが、ソウルと東京、さらにアジアといった大きな枠組みで、現在考えていることはありますか？

「自分自身は、よく商品化されがちな『韓国的なもの』にはあまり関心がないですね。韓国に生まれ、韓国語を使ってはいますが、韓国の伝統にはあまり興味がないんですよ。シンディー・ローパーとか（笑）、欧米のロックに馴染みのある世代なので。つまり、伝統に同化した経験がない。アジアについてはもっと知らないし、深く考えたこともないです。

とはいっても、最近の国際社会のなかでの力関係、アメリカやヨーロッパと区別したときの『アジア』とは一体何か、ということをぼんやりと考えることはあります。それにしても、みんなよくわかってないはずなのに、ことさらにアジアを定義しようとする風潮がありますよね。なかでも、ヨーロッパの歴史にならってアジアを定義し、それに追従していこう、といった意見が多く見受けられます。文化的なレベルでもそういったことがよく語られるのですが、私はそのように『アジア』として一括りにされることに対して、なんとなく違和感があります」

——最後に日本のみなさんにメッセージを頂けますか。

「この作品を通して、みなさんと何かを共有したい思いはもちろんあります。ただ大事なことは、メッセージを残したり、何かを主張することではなく、問いかけることです。というのも、何かしら定義されなければならないものが定義されないことが、この辛い現実そのものだと思うからです。むしろ、それをぶつけたときの戸惑い、見たくないものを見てしまったときの苦しさといった感覚を経験してもらいたい。歴史のなかで抑圧されている記憶と、私たちはどのように巡りあうことになるのか。そうした感覚を回復する方法論が、正確に皆さんに伝わればいいなと思っています」

（翻訳：李丞孝）

ユン・ハンソル（演出家、グリーンピグ代表）
1972年生まれ。大学で社会学を専攻した後、漢陽（ハンヤン）大学演劇映画科大学院、コロンビア大学大学院で演劇を学ぶ。2006年にグリーンピグを結成。07年、『私は嬉しい』で文芸振興基金新人アーティストに選定される。10年にはソウル・マージナル・シアター・フェスティバルにおいて『ステップメモリーズ—抑圧されたものの帰還』を発表。同年、『人は人に狼（英題：A Man Turns into a Wolf When They Meet）』で国立劇場フェスティバルの優秀演劇に選ばれるなど、韓国で最も動向が注目される演出家の一人。11年、「斗山蓮崗（トゥサンヨンガン）芸術賞」を受賞。檀國（ダングック）大学校教授。

ステップメモリーズ—抑圧されたものの帰還 / グリーンピグ
構成・演出：ユン・ハンソル

11月22日（木）～11月25日（日）
於：にしすがも創造舎

朝鮮戦争を題材にした『ステップメモリーズ』は、2010年にソウルのトータル美術館で上演されたパフォーマンス。観客は、体験者の証言の再現や思想書等の引用、歴史的資料、映像や音楽をコラージュして作られた場面（空間）を巡り、体験する。今公演では、日本人キャストが新たに参加、東京固有の歴史も踏まえリクリエーションされる。未曾有の体験、その記憶をいかに語り、伝えることができるのか。異国の地での実験は、その問いに新たな示唆を与える。

© Hansol Yoon